

「面目」再考—異文化間 コミュニケーションの観点から

井上逸兵

1. はじめに

本論では言語行動におけるポライトネスの研究の中心的な議論の対象の一つである「面目 (face)」について、異文化間比較あるいは異文化間コミュニケーションの観点から考察してみたい。特に、BrownとLevinsonのポライトネスモデル (1978, 1987) の鍵概念であるところの「面目」の普遍性について、いくつかの非アングロサクソンの言語文化における事例をもとに再考し、BrownとLevinsonのストラテジックなポライトネス観と、特に近年それに対するアンチテーゼとしてしばしば主張されている、ポライトネスを規範、慣習、期待への一致とみなす見解との関わり、「面目」の多面性、多次元性などについて論じることとする。

2. ポライトネスの原理と面目

ポライトネスの議論は少なくとも英米の言語学においては、BrownとLevinson以降、そのモデルを中心として展開してきた。Lakoff (1972, 1973, 1975など) の生成意味論的な試みやLeech (1983) の語用論の枠組みでとらえようとする試みもあるが、必ずしも実りの多い議論とは言えなかった (井上, 1996)。言語的なポライトネスのみに問題を限定するとしても、言語形式に重きを置くこれらアプローチには (それは言語学的な態度としてはもっともなことではあるが) 限界があったといわざるをえない。BrownとLevinsonはポライトネス現象の解明の手段を一般的には社会学や社会心理学の関心であるところの、社会的存在として対人的な関係に身をおく人間の行動原理に求めた。Goffmanから「面目」の発想を得て、英語の他に南インドのタミル語、メキシコのツェルタル語の例を引いて、ポライトネス現象の普遍性を主張し、その発想のユニークさもあって、この分野の研究に大きな影響を与えた。たしかに、本論でも取り上げるように特に非アングロサクソンの言語文化からの反証をもとにその普遍性を疑問視する議論も多くなされている。しかし、引用される頻度、批判の対象となり、議論の土台となる頻度から言ってもそのような議論がこのモデルをめぐる展開していることはその影響力の大きさを如実に物語っており、その後のポライトネス研究を活性化させたという意味でも彼らのモデルは現時点ではこの分野において中心的な役割を果たしているといっても過言ではないだろう。

本論でもこのBrownとLevinsonのポライトネスモデルを土台として議論をすすめることにしよう。まずはこのモデルの概略を見ておくことにする。彼らのモデルにおいては、すべてのモデル上の人物 (Model Person) が二つの特質、すなわち合理性 (rationality) と

面目とを持っていると仮定され、合理的にして実際的な推論によってコミュニケーション上の目的と面目に関わる目的とを果たすべく言語的なストラテジーを選択するとされる。彼らは、この Goffman から得たとされる「面目」の概念を、社会のすべての構成員が他の構成員が望んでいることを知っていて、しかも一般的にそれを満たすことがすべての構成員にとって利益であるような基本的な欲求だとする。そして、その欲求(=面目)を満たし脅かす行為という枠組みでポライトネス現象を扱う。「面目」は文化ごとにより詳細に規定されるが、基本的には普遍的な概念であるとされ、それには二つの側面があり、一つは消極的な面目(negative face, 以下NFとする)、もう一つは積極的な面目(positive face, 以下PF)である。簡潔に言えば、前者は自らの行動を他者に妨げられたくない、自由を阻害されたくないという欲求で、後者は自らの欲求が他者にとって望ましいものであってほしい、他者によく思われたい、友好的に思われたいという欲求である。発話は潜在的にそれらの面目を脅かす行為(Face Threatening Acts, FTA)という側面を持っており、その例として次のようなものがあげられている。すなわち、(i)聞き手のNFを脅かす行為: 命令, 忠告, 強迫など、(ii)聞き手のPFを脅かす行為: 不平, 非難, 反論など、(iii)話し手のNFを脅かす行為: 申し出の受け入れ, 謝辞の受け入れ, 気のすまない約束など、(iv)話し手のPFを脅かす行為: 謝罪, ほめことばの受け入れ, 告白などである。さらにとりうるFTAの類型として次のような図式になる。まず面目を脅かす危険性の程度に応じて状況を判断し、FTAを行使するかどうかを決断する。FTAを行使すると決定するなら、さらに“on record”か“off record”かのストラテジーを選択する。前者はここでは「一義的に解釈される」と考えてよく、一方後者は「一義的に解釈されない」、すなわち発語内の効力(illocutionary force)をそれとして解釈されない可能性のある表現を用いるということになる。 “Shut the window”は依頼, 命令などとして一義的にしか解釈されないが、“It’s cold in here”においては話し手が上と同様の意図を持っていたとしても、聞き手はそれを少なくとも自分への依頼として解釈する必要はなく無視することができる。またその際聞き手がそれを依頼として解釈したとしても、あなたに頼んだつもりはなかったと話し手自身が発語内の効力を否定することができる。つまり、その方が逃げ道を持っている分だけ面目への脅威は低いと考えられるわけである。“on record”のストラテジーを用いる場合、修正的行為(redressive action)をそれに加えるかどうかの選択をおこなう。最も面目を失う(失わせる)危険性が少ない場合(例えば、緊急を要したり、力関係が明白である場合)は修正的行為なしで、すなわちあからさまに(baldly)にFTAを行使し、修正を加える場合、PFとNFのどちらを強調するかで二つの形態をとる。PFに対するポライトネスストラテジーは主に連帯(solidarity), 非形式性(informality), 親しさ(familiarity)の表明という形をとる。例としては聞き手に関心を払いながらFTAを行使するというストラテジー (“Goodness, you cut your hair! (……) By the way, I came to borrow some flour.”) や話し手と聞き手が共通の土台にいることを前提とするストラテジー ([医者が患者に] “Now, have we taken our medicine?”) などがあげられる。一方、NFに向けられるポライトネスストラテジーは差し控え(restraint), 形式性(formality), 距離(distance)の表明という形をとる。慣習的な間接表現を用いること (“Can you please pass the salt?”) や押しつけを弱める表現 (“I just want to ask you if I can borrow a tiny bit of paper”) などが例としてあげられる。

それに加えて、このモデルではストラテジーの選択の際に必要とされるポライトネスの程度を、三つの独立した、文化的に左右されやすい変数によってFTAの大きさを算定することによって決定するとされる。すなわち、話し手と聞き手の社会的な距離 (social distance, D), 話し手の聞き手に対する相対的な権力 (relative power, P), その文化における押しつけのランク (ranking of imposition, R) の三要素である。FTAの重さはそれらの和によって ($W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$) 算出される。

本論では特に異文化間コミュニケーションあるいは異文化間比較という観点から「面目」について論じることにするので、BrownとLevinsonの枠組みを踏襲しつつ異文化間コミュニケーションを論じているScollonとScollon (1995) のポライトネスに関わるミスコミュニケーションについての考察をここで取り上げてみることにしよう。

ScollonとScollonによれば、会話の二人の参加者の面目に関わる算定が異なっているとその違いは権力の違いと認識される傾向があるという (Scollon and Scollon, 1995: 48)。一方の参加者がpositive politenessのstrategy (PPS) を用い、他方がnegative politenessのstrategy (NPS) を用いるとPPSを用いる方が両者のうちの上位に立つということである。例えば、一方がPPSを用いたとすると、他方の解釈の選択は二つである。すなわちそれを侮辱と見なすか長期間にわたる親密な友情の表れと見なすかである。話者の立場から見ると一方がPPSを用いるとその話者は相手からもPPSを期待するか (連帯関係と考えるならば)、NPSを期待するか (上下関係と見なし自らが上位者であると考えれば) である。もし前者が連帯の関係を期待し、後者がNPSを用いると前者は後者が自らを下位に置き、権力を前者に明け渡しているかのように感じられる。また、一方がNPSを用いた場合、その話者は相手からもNPSを期待する (お互いに敬意を払いあうべき関係と考えているならば)。しかし、相手がPPSを用いるならばその話者は相手が上位に立とうとしていると感じるのであろう。

以上がScollonとScollonの主張であるが、単純化されたモデルケースとしてもいくつかの問題点があると思われる。まず第一にこれらのミスコミュニケーションをすべて権力の次元に還元して考えるのは短絡的に過ぎるか、あるいはエスノセントリック (おそらくアングロセントリック) であろう。PPSを用いた話者が連帯の関係を期待し、相手がNPSを用いると前者は後者が自らを下位に置き、権力を前者に明け渡しているかのように感じられるというが必ずしもすべてのケースにこれが当てはまるとは言えない。このNPSが距離をつくるための装置 (distance builder) として機能し、権力の次元と直接は関わらない場合も十分に考えられるのである。そしてさらに重要な点は、彼らが「面目」を一元的にしかとらえていないということであるが、これについては後述するとして、次節では非アングロサクソンの「面目」に関わるいくつかの多元的な面目を考える糸口となるとと思われる事例を見てみよう。

3. 非アングロサクソンの面目

本節ではBrownとLevinsonが普遍的と主張する面目の概念に対する非アングロサクソンの言語文化からの反証をいくつかとりあげてみよう。まず、彼らの概念のもととなったと

される Goffman の「面目」に言及しながら中国語の事例を中心に考察し、Brown と Levinson のモデルを検証している Mao (1994) の主張を見てみたい。

Mao の指摘によれば、Brown と Levinson を特徴づける「面目」の見方はまずそれを欲求として考えることである。例えば、

- (1) It would have been possible to treat the respect for face as norms or values subscribed to by members of a society. Instead, we [Brown and Levinson] treat the aspects of face as basic wants, which every member knows every other member desires, and which in general it is in the interests of every member to partially satisfy. ([] 注は井上による) (Brown and Levinson, 1987 : 62)

にあるように、Brown と Levinson も「面目」を社会的な規範や価値とする立場もありうることを認識してはいる。しかし、彼らはこれを社会的存在としての人間の基本的な欲求と考えたのである。この個人的な欲求にポライトネス現象を還元させ、さらにはそれをもって普遍性を主張したことには後述するようないくつかの問題が潜んでいるが、とにかくそれが彼らのモデルの最も大きな特徴とってよいだろう。この考え方の根本にある原理は端的に言えば、「個人性」あるいは個人の「独立性」である。それはまず典型的に NF の概念に侵されざるべき領域を持った「個人」として表れ、また PF においても下の言説に見られるように“self-image”, “personality”として「個人性」が基本的な原理となっている。

- (2) “the public self-image that every member wants to claim for himself” consisting in “(a) negative face : the basic claim to territories, personal preserves, rights to non-distraction-i.e. to freedom of action and freedom from imposition” and “(b) positive face : the positive consistent self-image or ‘personality’ (crucially including the desire that this self-image be appreciated and approved of) claimed by interactants” (Brown and Levinson, 1987 : 61)

Brown と Levinson が発想を得たとする Goffman の面目を見ておこう。ここが Mao の主たる論旨であるが、Brown と Levinson の面目と Goffman のそれとは実はそれぞれの強調されるところが異なっており、中国の面目はむしろオリジナルの Goffman の面目に近いという。

- (3) The term *face* may be defined as the positive social value a person effectively claims for himself by the line others assume he has taken during a particular contact. Face is an image of self delineated in terms of approved social attributes
…… (Goffman, 1967 : 5)

ここでいう“line”とは自らの状況に対する見解を表明し、そしてそれを通して参与者、特に自分の評価を表明する言語的、非言語的なパターンのことである (Goffman, *Ibid.*)。その

概念も含めて Goffman の基本的な考え方と対照させるとより鮮明に Brown と Levinson の「面目」においては「個人性」が強調され、Goffman の方は社会性、相互行為性を中核とする概念であることがわかる。Mao も指摘するように Goffman のいう「面目」とは個人的 (private) あるいは「個々人の体に宿る」内在化された特性なのではなく、「一連の出来事に配置」され、他者の判断に支持され、「状況における非個人的な媒体」によって裏付けられたイメージなのである (Goffman, 1967: 7, Mao, 1994: 453)。それは社会から個人に貸し付けられた公的なイメージであり、個々人がそれにふさわしくないということがわかれば回収される (Goffman, 1967: 10, Mao, *Ibid.*)。Goffman にとっての「面目」は相互行為を条件として個人に与えられた「公的な特質」なのであるが、それとは対照的に Brown と Levinson は「面目」を本質的に「個人」、「自我」に属するイメージと特徴づけている。

Mao による中国 (語) の「面目」の概念を見てみよう。中国語には“face”に相当する語が二つあるという。一つは「面子 (miànzi)」であり、もう一つは「臉 (liǎn)」である。「面子」は威信あるいは名声を表し、それは世で成功をおさめていくうちに獲得されたものであることもあれば (Hu, 1944: 45, Mao, 1994: 457), その人物にコミュニティの他のメンバーによって備わっているとされる (あるいは備わっていると想像される) ものであることもある (Ho, 1975: 869-870, Mao, *Ibid.*)。一方「臉」の方は「集団からの、道徳的によい評判のある人物に対する尊敬」であり、「徳の高い性格の高潔さに対する社会からの信頼」を具現化したものであり、また「道徳的な基準を守らせる社会的な拘束力でもあり、内面化された拘束力」でもあるという (Hu, 1944: 45, Mao, *Ibid.*)。Brown と Levinson のモデルにおいては「面目」の共同社会的 (communal) な側面よりも個人的な側面が中心となるのとはある意味で対照的である。彼らにとって面目とはつまるところ自己のイメージであり、その自己は他者の面目が維持されることに依存する程度においてのみ「公的」なものなのである (Brown and Levinson, 1987: 61, Mao, 1994: 459)。一方で中国 (語) の「面目」はむしろ他者の参与に依存し、それによって決定づけられる。

- (4) Chinese face depends upon, and is indeed determined by the participation of others. To maintain one's Chinese face is, then, to perform a communal act “in the context of the immediate dyadic relationships in which we are inevitably circumscribed.” (Tu, 1985: 244)

(4)にあるように、中国の面目を維持するということはすなわち相互作用的に共同社会的なふるまいをすることである。中国 (語) の面目は先ほどの Goffman 流に言うならば「社会から貸し付けられた」もので個人の行為がその面目に従っている限りにおいて個人あるいは自我に帰属するのであり、相互行為的なプロセスを通して得られるものなのである。言い換えれば中国 (語) の面目は譲渡されえない、天与の権利ではないということである (Mao, 1994: 460)。また中国 (語) における個人は集団や共同社会の尊敬を得ようとするとは考えられるが、Brown と Levinson が言うような自由への欲求を満足させようとは考えられていないのである (Mao, *Ibid.*)。

Matsumoto (1988) による日本 (語) の事例を見てみよう。彼女によれば、日本人は一

一般的に自分の集団や社会の他のメンバーとの関わりにおける立場を理解し、他者に依存していることを様々な方策を用いて表明せねばならず、ここでも先ほどの中国（語）に関する Mao の指摘と同様、個人の領域の保持に関わる面目は重要ではなく、日本（語）ではそれよりもむしろこの他者との関係の認知と維持がすべての社会的相互行為を支配しているという。例えば、日本語で儀礼的にしばしば用いられる「どうぞよろしく願いたします」という表現は Brown と Levinson の枠組みでいうと依頼であるから相手の NF への脅かしということになる。しかし、これは少なくとも儀礼的である限りにおいては相手に対する押しつけとは一般に感じられず、逆に聞き手は依存される立場という日本社会ではよい自己イメージを得るか維持することができる。すなわちこれは敬意のあるおしつけ（deferent imposition）であり、聞き手の面目を高めることから当然 P P S と見なされるはずである。Brown と Levinson のモデルの普遍性に対する今一つの問題は、このような面目の高め方は直接相手の好意的な自己イメージを高めようというのではなく、押しつけによってなされることであり、また Brown と Levinson のいうような P P S とは異なり、親密さの表明でもないということである。場合によってはこれは距離を作り出す態度の表明にもなりうる。このような表現を Matsumoto は「関係認識装置（relation-acknowledging devices）」と呼んで日本（語）でのコミュニケーションに不可欠な要素としている。日本語の話者にとって会話の参与者、指示対象、第三者などはすべて会話に大きな関わりがあって、それらとの対人的関係を知覚し、認識することがつねに重要なので、日本語にはそのような認識をコード化する様々な方法が備わっているのである。そして日本（語）の「面目」がいかにか Brown と Levinson のものと異なっているかは次のような一節にあらわされている。

- (5) Since a person's self-image in Japan is not as an independent individual but as a group member having certain relations to others, his concept of 'face' is understandably fundamentally different from that of, say, Europeans, who define themselves as individuals, with certain rights and a certain domain of independence.

(Matsumoto, 1988 : 423)

日本人の自己イメージは独立した個人としてのものではなく、他者に何らかの関係を持っている集団のメンバーとしてのものなので日本人の「面目」は、ある種の権利と独立性をもった個人として自らを定義づける、例えばヨーロッパの面目⁽¹⁾とは根本的に異なっているといえる。ただし、この「集団のメンバー」という概念には若干の問題があると考えられるがそれについては後述することにしよう。

次に Nwoye (1992) によるイグボ族、イグボ語 (Igbo) の事例を見てみよう。イグボ社会の特徴とされるのはもてなし (hospitality) であり、それは富めるものから貧しいものへの施しというようなものではなく、よき隣人であること (good neighbourliness) の表れであり、イグボ流の社交の方法だという (Uchendu 1975 : 71, Nwoye, 1992 : 313)。(6)の例はイグボ社会では面識のないもの同士でも典型的になされるやりとりである。つまり、西洋、あるいは我々の尺度では社会的距離が大きいと思われる相手であってもイグボ社会では容易に依頼をすることが可能であり、またそれを容易に受け入れるのがイグボの特徴なので

ある。

(6) moto m nɔkatalu kwuʃi bja nyelu m aka kwaa ya aka.

(‘My car has suddenly stopped, come and help me push it’)

(Ngwa, ka anyi jebe)

’(Quickly, let us go)’

(Nwoye, 1992 : 317)

この場合の依頼を受けた人物がこのように依頼に応じるのは相手が公的な精神が備わっていない、適切に社会性を身につけていない人間として自分を低く評価することを好まないためであるという。このような種類の要請に対して応じることは期待された行動の規範への反応なのである。また、イグボ社会では子供は非常に幼い頃から人に食物を共にするように誘う必要性を理解し、その適切な方法を身につけるべく社会化させられる。子供は話し始めるとすぐぐらいの時期にこの食物を共にする勧誘ができることを期待される。訪問客や隣人はその家の主人と食事を共にするようフォーマルに招かれるが、イグボにとってこれは単なる礼儀ではなく、本心からのものであるという⁽²⁾。またこの「もてなし」を拒絶することは大きな侮辱と考えられている。おそらく(7)にあるようにイグボ社会では「共有性」が重要な概念となっていることもその一因であろう。

(7) …in the Igbo culture, where gregariousness rather than atomistic individualism is the norm, where people are still to a large extent their ‘brother’s keepers’, very few acts are considered as impositions (Nwoye, 1992 : 316)

原子的な個人よりも集団性、群居性 (gregariousness) が規範であり、集団のメンバーがお互いに共有しあい、互助の関係にあるので (「弟の番人 (“brother’s keeper”」)、 「押しつけ」と考えられる行為はきわめて少なく、「もてなし」はそのような集団内の連帯を確認する役割を担っているのであろう。また、Nwoyeによればイグボ社会においては個人の自己イメージよりも集団の集合的 (collective) 自己イメージに対する関心の方が高く、集団が大きくなるほど集団の「感情」に対する配慮は強制的でなくなるという。つまり、親族など近い集団の方が集団の圧力が大きく、挨拶が適切にできないと“impolite”ではなく“improperly brought up”と非難される。このような観察からすると、イグボ社会では依頼などもほとんど押しつけとみなされないが、西洋あるいは日本などで face risk が低いために押しつけが F T A とならない、例えば親密さの度合いが高い場合などとは質的に異なっているようである。お互いに負荷を与え、与えられあうことで共同体としての結束を高めていると考えられる。

イグボのような社会と西洋の社会⁽³⁾との違いを端的に表現するなら後者が個人志向で前者が集団志向であるといえよう。ここで Nwoye の注目すべき主張は「面目」の概念は発見的な装置としては有益であるけれども、それを「個人的な面目」と「集団の面目」に下位範疇化すべきということである。「個人的な面目」とは個人的な必要に応じて、他者の公的自己よりも自らのそれを優先させたいという欲求である。一方、「集団的な面目」とは社会によ

って慣行化され、是認されている文化的に期待された行動の規範に従って振る舞いたいという個人の欲求のことである⁽⁴⁾。この見解はある意味では本論での問題意識を集約させたものということもできるが、このような「個人」/「集団」という二元的な面目に対する考え方、文化的に期待された規範への一致という見方については次節以降においてさらに論じることにした。

そのほかに直接「面目」には言及してはいないが、BrownとLevinsonの「面目」、特にNFの概念の普遍性への反証となるものとしてWierzbicka(1991)のポーランド語からの事例がある。例えば、(8)のような間接的な勧誘の形式はBrownとLevinsonの枠組では押しつけを弱めるためNFへの脅威を軽減することになるが、それはポーランド語ではむしろ相手の願望を直接に表させるためにかえって無礼となり、(9)のような勧誘の形式が一般的で、(8)はおそらく純粋な疑問としてのみ解釈され、依頼としての発語内の効力は持たないという。

(8) Czy miałybyś ochotę pójść ze mną do kina?

'Would you like to go to the cinema with me?'

(9) Możebyśmy poszli do kina?

'Perhaps we would go to the cinema?'

(Wierzbicka, 1991: 29)

また、Schiffrin(1984)のユダヤ人の社交性を表す議論もアングロサクソンの「面目」とは異なる事例として見なすことができるだろう。ユダヤ人にとって反論することは相手の自我を攻撃しない限り、むしろ相手との親密さを生み出すか維持することになるという。したがって、BrownとLevinsonの枠組みではPFへの脅かしと考えられるものもむしろこの文化ではPFを高めることになることなのである。その他にもSifianou(1992)のギリシャ人とイギリス人の比較、すなわち後者はプライバシーや個人性により高い価値をおき、前者は関わり(involverment)や集団内の関係により高い価値をおくという観察や、Gu(1990)の中国(語)のポライトネスにおける私的な面目と公的な面目との区分の提示、Yahya-Othman(1994)が論じている、スワヒリ社会における第三者への修正(redress)のストラテジーに特徴づけられるような社会のネットワークの中での地位の重要性、そしてそれに関わる「面目」観など数多くの事例が報告されている。

以上のような例を見るとBrownとLevinsonの主張する「面目」の普遍性には大きな疑問符をつけざるをえないが、これらの反証にはある程度の共通性がある。それはすなわち単純化して言えば、BrownとLevinsonの枠組での過度の個人の独立性に対する批判、それと基本的には同じ趣旨のものであるが「個人志向」対「集団志向」という対立的図式による批判、そして個人の欲求を満たすべきストラテジックなポライトネスにたいするものとして反例としてあげられる、社会的な規範、期待への一致というポライトネス観である。これらはいずれも関連していると考えられるが、次に特に社会的規範、期待への一致というポライトネス観を概観し、その後には異文化間コミュニケーションを想定した場合により明確になると思われるいくつかの問題を論じることにした。

4. 適切性モデル

Brown と Levinson のポライトネスモデルが広く知られるようになって以来⁵⁾、大別して二種類の議論がこのモデルを中心として展開してきた。一つは前節に見たような非欧米、非アングロサクソンの事例に基づいた普遍性への問いであり、いま一つはポライトネス現象におけるストラテジーとしての側面の偏重に対する疑問であった。その普遍性はともかくとしても、「面目」という概念がかなり妥当なものとして受け入れられ、それを満たし、あるいは高めようと意図する言語行為がなされるということにおいては基本的に論者間で意見の一致を見ており、一般の話者にとってもおそらく理解しうるものであろう。しかしこのようなストラテジックなポライトネスはポライトネス現象のある一面に過ぎないという主張も特に近年盛んになされてきた。それらの主張は論者によって形式や用語の違いはあれ、概略においては「適切性、社会文化的な期待、慣用性、規範への一致」と要約することができる。ここではそのようなポライトネスに対する見解を「適切性モデル」と呼ぶことにする。本節ではポライトネスのいくつかの適切性モデルを概観し、先の非アングロサクソン文化の事例とあわせて、後述する異文化間コミュニケーションの状況におけるポライトネスの問題を論じる土台とすることにしよう。

まず、Ide (1989) の「働きかけ (volition)」と「わきまえ (discernment)」の概念を見てみよう。ポライトネスにはこの二つの側面があり、Brown と Levinson のようなストラテジックなポライトネスは前者に属し、社会的な慣習に従ってポライトな行為を行うことは後者に属するとされる。「働きかけ」は話し手がその意図に応じてかなり能動的に選択を行うポライトネスの側面である。それに対して「わきまえ」に従って振る舞うこととはある状況において、社会の慣習にしたがって自らの立場や役割を言語的、非言語的に示すことである。すなわち前者が話し手の意図に焦点が置かれるのに対し、後者は社会的に規定された規範に焦点が置かれる。後者は役割や状況志向であり、ある状況の形式的であるべき程度に関わる規範に合わせ、会話の参与者の与えられた立場や役割を表したいという欲求に主に向けられたものである。

Fraser の会話の契約 (Conversational Contract, 以下 C C) のモデルも「適切性モデル」のひとつに数えられよう。このモデルでは Grice の C P を基本的なレベルでは採用し、Goffman の面目の概念の重要性も認めているが、いくつかの重要な点で Brown と Levinson のものと異なっている。それは会話の参与者が義務と権利の一種の契約関係をもって会話を営んでいるという点である。そして会話の参与者は初期の段階では基本的に無標の契約関係にあり、会話がすすむにつれてこの初期の契約関係を常に再交渉していく可能性を持っているという。会話の相互作用を行う参与者がこの契約関係を確立する次元は、ほとんど交渉不可能な一般的なもの (会話の順番 (turns) をとったり、理解可能な言語を使用したり、聞き手が聞き取れる大きさの声で話したりすることなどが期待されるレベル) から、社会的な制度が要求していると思われるもの (法廷での証人は質問を受けたときのみ話さねばならないことなど)、前回のお会いや状況によって決定されるものまで様々である。最後に挙げた次元での会話では契約事項は参与者の地位、権力、役割などの要素によって再交渉されて

いく。この観点から言えば、ポライトネスはつねに進行状態にある (on-going) プロセスであり、社会的に期待され、要求された行動の規範である。そして以下の二つの引用に見られるように、会話の参加者は一般的にこの規範の範囲内で行動することが要求されていることを意識しており、ポライトネスとはこの社会的に同意された好ましい行為のコードに合致させることとされている。つまり、ポライトであることは特別なものではなくそれが標準なのであり、この契約に違反したときにはじめてポライトではないと認識されるのである。

- (10) In short, we enter into a conversation and continue within a conversation with the (usually tacit) understanding of our current conversational contract (CC) at every turn. Within this framework, being polite constitutes operating within the then-current terms and conditions of the CC. (Fraser, 1990 : 233)
- (11) Politeness is a state that one expects to exist in every conversation ; participants note not that someone is being polite - this is the norm - but rather that the speaker is violating the CC. (Fraser, *Ibid.*)

このモデルでは Brown と Levinson がいうようにポライトであるという意図がそれ自体メッセージとして伝達されるわけではなく、ポライトであることは CP を遵守し、かつ CC を遵守している証明としてうけとめられる。この観点から言えば彼らのとりあげている現象のほとんどは意図された敬意 (intended deference) として扱われることになるだろう。

Meier の謝罪行動に見られる修復作業に対する提案は Fraser とはややことなった枠組みであるが、ポライトネスをその社会における適切性 (appropriateness) ととらえる点で共通している。修復作業とは行為者 (actor) とあるグループによって期待された基準を下回った行為との責任の接続 (responsibility link) のもとに、行為者のイメージが被った被害を補修するという機能を果たす。被害を被ったイメージは話し手と聞き手の世界の分岐をもたらすが、修復作業のストラテジーはイメージの修復とともにこの分岐した世界の収束を促進する。修復作業は相互作用的な会話であり、社会的な関係の確立と維持を目的とする⁽⁶⁾。つまり修復作業とは話し手が「よい人 (good guy)」であり、社会的な規範に合致した適切な行動をとっていることを示そうとする試みである。(12) のような言説において「適切性」が強調される。

- (12) ……politeness can only be judged relative to a particular context and a particular addressee's expectations and concomitant interpretation. ……Certain address forms, for example, would not be described as more polite than others, but within a particular speech community would convey a certain amount of deference, which could either be appropriate (polite) or inappropriate (impolite) for a given situation or a point within it. (Meier, 1995 : 387)

またポライトネスはすべての社会がその文化特有の (すなわち文化によって様々な) 適切な行動に対するある種の規範を持っているという意味においてのみ普遍的だと言う(13)の主張は

後にも触れる異文化間コミュニケーションの尺度としてのモデルとしても示唆的である。

- (13) Politeness can be said to be universal only in the sense that every society has some sort of norms for appropriate behavior, although these norms will vary.

(Meier, 1995 : 388)

次に Watts (1992) の“politic behavior”という捉え方を見てみよう。これは上に挙げたいくつかの「適切性モデル」よりも包括的であり、ストラテジックなポライトネスとの関わりにおいて「適切性モデル」を的確に規定している優れたモデルであると思われる。Watts は明白な問題がなく、相互依存的な社会関係の構造において均衡関係が維持されている無標の相互行為の形態を“politic behavior”と呼んで次のように定義した。

- (14) “socio-culturally determined behaviour directed towards the goal of establishing and/or maintaining in a state of equilibrium the personal relationships between the individuals of a social group, whether open or closed, during the ongoing process of interaction”

(Watts, 1992 : 50)

これは Fraser 的な言い方をすれば「会話の契約」が履行されている状態であるが⁽⁷⁾、さらに二つの有標の相互行為の形態が考えられる。一つはコミュニケーション上の障害に至るもので、もう一つは他者との関わりにおける自我の立場を高めるもの、すなわち他者がその人物に対してよりよく思うようにせしめるものである。前者は“non-politic”であり、後者が“polite”である。すなわち「ポライト」な行為と見なされるものはそのスピーチコミュニティにおいて単に“politic”である以上のものとして社会文化的に有標とされる相互行為の特徴によるものなのである。“politic behaviour”とは社会的に適切な行動であり、呼びかけ形式や敬語や儀礼的な表現やスピーチイベントが“polite”であると解釈されるのはそれが社会文化的に制約を受けた“politic behaviour”としての標準的な用法以上のものである場合なのである。ただし、“politic”と“polite”との関係は「適切性」と「ストラテジー」のそれと必ずしもパラレルではない。むしろ「適切性」を中心としてそれとの関わりにおいてストラテジックなポライトネスを位置づけたモデルと言うべきであろう。

以上「適切性モデル」のいくつかを見てきたが、これを踏まえて次節では異文化間コミュニケーションを事例と想定することでどのような視点が得られるかを考察してみたい。

5. 異文化間コミュニケーションと「面目」

5.1. 「ストラテジー」と「適切性」

これまで「面目」の文化的な多様性と Brown と Levinson に代表されるストラテジックなポライトネスがよってたつ「面目」観に対して、特に近年盛んに論じられている「適切性モデル」のポライトネス観の基礎をなす「面目」について見てきた。本節では異文化間コミュニケーションを事例と想定することで得られると考えられるいくつかの問題について論じ

てみたい。「ストラテジー」と「適切性」との境界、面目の多面性、多次元性を中心に論じることになろう。

ポライトネス現象を「適切性」のみにおいて説明することにも無理があることはすでに井上(1996)において指摘した。ポライトであることが標準であるというならば、ある表現があるものよりも丁寧だということが可能なのはなぜなのか、同じ状況でいずれも適切とされる表現群のうち、ストラテジックにあるものを選択する動機付けはいかに説明しうるのか、といった問題が残されてしまう。また、このモデルは少なくとも実際の異文化間コミュニケーションのためのモデルの一部として考えるならば経験的な事例研究の積み重ねがない限りほとんど無益に等しい。異文化のポライトネスモデルを理解しようとする者にとって何が標準なのか、何が適切なのかということは何も教えてくれない⁽⁶⁾、という指摘も同時に行った。ここでは異文化間コミュニケーションを想定して「面目」に焦点を当てて「ストラテジー」と「面目」について論じることにしてみたい。

まず「適切性モデル」でしばしば用いられる「規範(norm)」という概念に着目してみよう。この語は論者によっては「標準」という日本語訳も適切かと思われるような概念であるが、どの論者にしてもおそらく社会学などで考えられるような内面化された、それに従うことが無意識的、非意図的であるような「規範」とは異なっているようである。例えば先に見た Nwoye のイグボ族の「集団的面目」については

- (15) Group face, on the other hand, refers to the individual's desire to behave in conformity with culturally expected norms of behavior that are institutionalized and sanctioned by society. (Nwoye, 1992 : 313)

とあるように「規範」に従うことは「個人的な欲求」とされており、Ide にしても以下のように「規範」に適応することを欲求とみなしている。

- (16) discernment is oriented mainly toward the wants to acknowledge the ascribed positions or roles of the participants as well as to accommodate to the prescribed norms of the formality of particular settings. (Ide, 1989 : 231)

その他の例を見ても「適切性モデル」における社会的規範という見方は集団の他のメンバーに対する社会的な義務を意識していることから起こると考えられる。つまり、内面化された、非意図的な営みではなく、コミュニケーションの参加者の目的的行為という側面があるのである。これは先ほど述べたように異文化においてポライトに行動しようとする場合には特に顕著である。適切であるということは同一文化内であればその規範は内面化されたもの、意図的ではないものということにもなりうるが、異文化との接触という場合には適切であることすらも学習されねばならない。すなわち意図的なのである。このような視点から言えることは自文化においても程度の差はあれ同様に「規範」に従うことは意図的でありうるということである。Brown と Gilman (1960) も取り上げているように、Ide 流にいう「わきまえ」的な言語使用である二人称代名詞の T/V の使い分けにしてもストラテジックな側面が

ありうるし、日本語の敬語の使用についても、書店に「正しい敬語の使い方」の類の本が多数あることは、いかにそれが習得困難で意図的であるかを物語っているといえよう。また、戦略的なポライトネスも社会的な規範から完全に自由ではなく、例えば「相手に対する気遣い」というような戦略は社会的な規範とは独立して相手の心理に訴えかけるものがあるが、「気遣い」によって「常識のある人」というような評価を受ける場合には社会的な規範の遵守に近いものがあると考えてもよかろう。そのように考えていくと戦略的なポライトネスと「適切性モデル」との境界は実はあまりはっきりしないものということになる。異文化間コミュニケーションにおいても同一文化内のコミュニケーションにおいても程度の差はあれ、また質的な差はあれ同じような問題があり、異文化間コミュニケーションにおいては特にそれが顕在化するるのである。

5.2. 面目の多元性

このような見地に立つと、「戦略的なポライトネス」と「適切性モデル」という対立の図式からさらに「面目」そのものを多元的に捉えるという新たな視点が得られると考えられる。すなわち Brown と Levinson の主張の根本にある人間のコミュニケーション行動の二側面 (NF と PF) の面目と社会的に適切な行動をとることによって得られる面目の少なくとも二つの次元における面目があるとすべきであろう。Brown と Levinson の主張する「面目」の概念はその提示のしかたや用例にはアングロセントリックな面があることは否めないが、これまで見てきたような彼らに対する批判やその反証を十分に考慮したとしても、彼らの主張を根本的な部分では否定するだけの材料はなく、Bateson のいう「二重拘束」的な意味での、人間のコミュニケーションにとってもっとも基本的な部分においては依然として妥当性を持っているように思われる。最も日常的と思われる場面において、相手に対して寡黙であればあるほどそうでないより連帯を強め、饒舌であればあるほどそうでないより相手の独立性を高めるような社会・文化でもない限り、彼らの「面目」の基本的有効性は損なわれないであろう。そしてその一方で数多くあげられる非アングロサクソンの事例に見られる社会文化的に規定される程度のより高い「面目」も存在すると考えられなければならないことはこれまでで論じてきた通りである。

これは言語行動そのものにおける多次元性、多面性とも無縁ではない。Bateson 的にいえば、相手に話しかけるという行為は交感的 (phatic) な意味では相手の PF を高めるが、同時に相手を会話に巻き込むという意味ではある種の押しつけをあたえることで相手の NF への脅かしになる。また、間接的で押しつけを弱める方策を用いて話しかけることは、相手の PF と NF の両方を満たすことになったり、Holmes (1990) の指摘にあるように、謝罪によって話し手は自身の PF を保持するというような現象を矛盾と考えるのは皆面目を一元的なものにとらえるがための誤りであるといつてよいであろう。言語形式に関して言っても、ファーストネームで呼びかけて (PPS) 間接的な依頼を行う (NPS) という場合のように多元的に考える必要があると思われる。

またこのような多元的な視点は、異文化間コミュニケーションを考慮する場合、あるいはポライトネスの異文化間の対照研究、民族誌的研究を行う場合でも共通の尺度として有効であろう。言語学の基本的なスタンスとして普遍性を求めるのは理解できるが、少なくとも民

族誌的な立場から言えば、強引に作り上げられた普遍的モデルよりも様々な尺度をもった多元的なモデルの方がはるかに有効であるはずである。冒頭で議論の出発点にした Scollon と Scollon のミスコミュニケーションに関する観察にしても、面目の算定の違いが権力の差に還元されるかどうかはどのような次元の面目が問題になっているかによって異なるのである。

5.3. 「個人主義」と「集団主義」

しかしながら、多元的とはいえ、Nwoye が言うような「個人的面目 (individual face)」と「集団の面目 (group face)」という図式には誤った一般化の恐れがあることも指摘しておかなければならない。例えば日本人の特質としてしばしば描かれる「集団主義」が欧米の「個人主義」的発想のバイアスのかかったものであることはすでに濱口 (1977)、間 (1980) らによって指摘されている。「個人性」が未確立であるとされるのは「個人」と「集団」とを対立させた西欧的な観念のためであり、例えば濱口の言う「連帯的自律性」のような非西欧的な特質をもった「個人性」は日本人においても認められるし、濱口が「間人主義」と呼ぶような、状況依存的で、対人関係の中で自己を意識するような人間観、木村 (1972) のいう「人と人之間」というような基本的人間モデルが日本人の根底にあると考えられる⁽⁹⁾。また逆に、例えばアメリカ人の方が日本人よりもコミュニティに対する関心が高いと見受けられるような観察からも欧米人の方が「集団的」といえるような側面もあるのである⁽¹⁰⁾。

ポライトネスの問題に話を戻すと、ある文化・社会のポライトネスの現象がイグボや日本のように「集団的」と言われていても言語行動においてはかなりの程度に個人の問題に還元できると思われる。それは言語行動は基本的に個人によってなされ、話者とは基本的に一人であるというごく単純な原理のゆえにである。例えば、Matsumoto が「関係認識装置」と称した「よろしくお願ひします」という表現は Ide で言えば「わきまえ」的に、あるいは「適切性モデル」的にポライトで、話者の自己イメージを高めうるということを考えてみよう。これは Matsumoto が言うように日本の社会文化では自分が他者に対して依存する関係を示すことが自己の面目を高めるからだと考えられる。しかし、「娘をよろしくお願ひします」という発話はそれによって「娘」が相手に対して依存していること表明しているが、この意味での面目が高まるのは「娘」ではなくやはり話者なのである⁽¹¹⁾。要するに集団との関わりを重要視する面目と他者あるいは集団のための面目を保持する（自分の面目を犠牲にして）という「集団性」は区別されねばならないということである。

6. おわりに

以上「面目」の概念を、Brown と Levinson の主張を出発点として異文化間比較、あるいは異文化間コミュニケーションの観点から再考を試みた。そこに視点を置くことで、いくつかの問題提起ができたように思う。ポライトネスの議論における「ストラテジー」と「適切性」の関わり、面目の多元性、多面性を中心に論じたつもりである。これらの議論をさらに精緻すすめることは今後の課題としたい。また、このような議論をさらに発展させるためにもさらに様々な言語文化の民族誌的な研究を積み重ねていくことが必要であろう。

註

- (1) Matsumoto は「ヨーロッパ人」という言い方をしているが、これはむしろすべてのヨーロッパ人に当てはまるわけではない。「罪の文化」/「恥の文化」という図式でいうと古代ローマ人は日本人と同様後者に属すると言われている。
- (2) この場合の「本心から (sincere)」とは心がこもっているということよりむしろ口先だけでなく本当に招待するということとあってよい。後述するがイグボにおいてもこの集団性の背後には結局のところ他者との関わりにおける自己が行動様式を決定づける要因として存在すると言えそうである。
- (3) 注(1)と同じ趣旨のことがここでも当てはまるが、Nwoye 流の表現にここではしておくことにする。
- (4) ここで『個人の』欲求」といっていることに後で注目したい。
- (5) 最初に出版された1978年の時点ですでに長く、この論文はいわゆるアングラペーパーとして一部に出回っていたと言われている。
- (6) Brown と Levinson のモデルと大きく異なるのは話し手のイメージを中心とし、聞き手の面目に対する配慮は話し手の面目を保持しようとする試みの副産物と考えられていることである。これは後述する「個人」/「集団」の議論とも関わりがあると思われる。
- (7) Watts の主旨から言えば、これは Ide の「わきまえ」にも共通するものであるが、“a state of equilibrium”を額面通り受け取れば必ずしもそうとは言えない。例えば日本語で敬語を使用することは Ide からすると「わきまえ」が示されていると考えるべきであろうが、これが“equilibrium”といえるかどうかはなほ疑問である。Watts の意図が「平等」ということではないとしてもアングロセントリックという非難は免れえまい。
- (8) その意味では Brown と Levinson のモデルは少なくともアングロサクソンの文化におけるポライトネスモデルを提示している点では有益である。
- (9) 井上 (1995) ではこれらの問題が新聞の野球報道を糸口としても論じうることを示した。
- (10) 例えば、日本の伝統的な「スポーツ」は皆一対一だが、欧米のスポーツの多くはチームで行う。
- (11) もちろんこれは「自己 (self)」の概念が「集団的」とあるという議論はありうるが、ここでは別の問題である。

引用文献

- Brown, Roger & Albert Gilman. 1960. The pronouns of power and solidarity. In Thomas A. Sebeok (ed.). *Style in Language*. MIT Press, pp. 253-276.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1978. “Universals in language usage: politeness phenomena.” in Esther N. Goody (ed.) *Questions and Politeness*. Cambridge. pp. 56-289.
- . 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge. Fraser, Bruce.
1990. “Perspective on politeness.” *Journal of Pragmatics*, 14: 219-236.
- Goffman, Erving. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Pantheon Books.
- Gu, Yueguo. 1990. Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics*, 14: 237-257.
- 濱口 恵俊 1977. 『日本人らしさ』の再発見』日本経済新聞社

- 間 宏 1980. 「集団主義と個人主義」『現代のエスプリ』160: 2-33
- Ho, David Yau-fai, 1975. "On the concept of face." *American Journal of Sociology*, 81: 867-884.
- Holmes, Janet. 1990. Apologies in New Zealand English. *Language in Society*, 19(2): 155-199.
- Hu, Hsien Chin, 1944. "The Chinese concepts of 'face'." *American Anthropologist*, 46: 45-64.
- Ide, Sachiko. 1989. "Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of universals of linguistic politeness." *Multilingua*, 8: 223-248.
- 井上 逸兵 1995. 「日米の野球報道に見る言語と文化の型」日本記号学会編『記号の力学（記号学研究15）』pp. 129-142.
- . 1996. 「異文化間のミスコミュニケーションとポライトネスモデル」『人文科学論集（文化コミュニケーション学科編）』（信州大学人文学部）第30号 pp. 13-31.
- 木村 敏 1972. 『人と人之間』弘文道
- Lakoff, Robin. 1972. "Language in context", *Language*, 48(4): 907-27.
- . 1973. "The logic of politeness: or, minding your p's and q's." *Papers from the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*. pp. 292-305.
- . 1975. *Language and Women's Place*. Harper & Row.
- Mao, LuMing Robert. 1994. "Beyond politeness theory: 'face' revisited and renewed." *Journal of Pragmatics*, 21: 451-486.
- Matsumoto, Yoshiko. 1988. "Reexamination of the universality of face: politeness phenomena in Japanese." *Journal of Pragmatics*, 12: 403-426.
- Meier, A. J. 1995. "Passages of politeness." *Journal of Pragmatics*, 24: 381-392.
- Nwoye Onuigbo G. 1992. "Linguistic politeness and socio-cultural variations of the notion of face." *Journal of Pragmatics*, 18: 309-328.
- Schiffrin, Deborah, 1984. "Jewish argument as sociability." *Language in Society*, 13: 311-335.
- Scollon, Ron & Suzanne Wong Scollon. 1995. *Intercultural Communication: A Discourse Approach*. Blackwell.
- Sifianou, Maria, 1992. *Politeness Phenomena in England and Greece: A Cross-Cultural Perspective*. Clarendon Press Oxford.
- Tu, Wei-ming, 1985. "Selfhood and otherness in Confucian thought. In Anthony J. Marsella, George DeVos and Francis L. K. Hsu (eds.) *Culture and Self: Asian and Western perspectives*. pp. 231-251. Tavistock Publications.
- Uchendu, Victor C, 1965. *The Igbo of Southeast Nigeria*. Holt, Rinehart and Winston.
- Watts, Richard J., 1992. "Linguistic politeness and politic verbal behaviour: reconsidering claims for universality." In Richard J. Watts, Sachiko Ide and Konrad Ehlich (eds.) 1992. *Politeness in Language: Studies in its History, Theory and Practice*. Mouton de Gruyter. pp. 43-69.
- Wierzbicka, Anna. 1991. *Cross-Cultural Pragmatics: The Semantics of Human Interaction*. Mouton de Gruyter.
- Yahya-Othman, Saida, 1994. "Covering one's social back: politeness among the Swahili." *Text*, 14: 141-161.